

■東京スプリント(JpnⅢ)アラカルト(過去全 27 回の分析)

※第 19 回(平成 21 年)までは東京シティ盃競走として実施

※第 20 回(平成 21 年)からダートグレード競走として実施

※平成 21 年は同年に第 19 回(東京シティ盃)、第 20 回(東京スプリント)を実施。よって本資料は 26 年間 27 回の分析とする。

※第 1 回から第 11 回、および第 14 回から第 16 回までは 1400m で実施

※第 12 回、第 13 回は 1390m で実施

※第 17 回以降は 1200m で実施

※第 19 回までは 1~3 月に実施

※第 20 回以降は 4 月に実施

※記録は平成 29 年 3 月 20 日時点

■単勝 1 番人気に推された馬の成績が優秀

過去 27 回の優勝馬延べ 27 頭中、過半数の 14 頭は単勝 1 番人気の馬だった。なお、単勝 1 番人気の馬は 2 着が 6 回、3 着も 2 回あり、連対率は 74.1%、3 着内率は 81.5%に達している。ちなみに、単勝 1 番人気の馬が 4 着以下となったのは、現在のところ東京シティ盃として施行されていた第 18 回(平成 20 年)が最後だ。前評判がもっとも高い馬はそれなりに信頼できるレースと言えるだろう。

■複数回の優勝例がある馬はフジノウェーブのみ

複数回の優勝例がある馬は、第 17 回と第 19 回を制したフジノウェーブのみであり、連覇を果たした馬はまだいない。なお、フジノウェーブは他に 2 着が 2 回、3 着が 1 回ある。

■牝馬は 2 勝どまりだが……

過去 27 回の優勝馬延べ 27 頭中、牝馬は第 24 回のラブミーチャン、第 27 回のコーリンベリーだけだ。第 23 回までは優勝例がなかったものの、ここ 4 回のうち 2 回で優勝を果たしている点には注目しておくべきかもしれない。

■外国産馬は“リニューアル”後に 2 勝

過去 27 回の優勝馬延べ 27 頭中、生産地が外国だったのは、第 21 回のスーニ、第 26 回のダノンレジェンドだけだった。どちらもダートグレード競走として施行以降の優勝馬であり、生産国がアメリカだった点も共通している。

■優勝馬の過半数は 6 歳以上

馬齢別の勝利数を見ると、4 歳の馬は 4 勝、5 歳の馬は 7 勝、6 歳の馬は 8 勝、7 歳の馬は 7 勝、8 歳以上の馬は 1 勝となっていた。第 26 回と第 27 回はそれぞれ 5 歳の馬が優勝を果たしたものの、全体の 6 割弱を 6 歳以上の馬が占めており、高齢馬が強いレースと言えるかもしれない。

■“リニューアル”後は JRA 勢が優勢

所属別の勝利数を見ると、TCK 所属馬が 13 勝、JRA 所属馬が 7 勝、船橋所属馬が 5 勝、川崎所属馬が 1 勝、他地区所属馬が 1 勝(第 24 回のラブミーチャン。笠松所属)となっている。なお、浦和所属馬は優勝例がない。ちなみに、ダートグレード競走として施行された第 20 回以降に限ると、JRA 所属馬が 7 勝、他地区所属馬が 1 勝だ。

■騎手別の勝利数は「3」が最多

騎手別の勝利数を見ると、3 勝をマークした石崎隆之騎手、早田秀治騎手、御神本訓史騎手がトップタイとなっている。なお、ダートグレード競走として施行された第 20 回以降に限ると、複数回の優勝例がある騎手はまだいない。

■調教師別の歴代最多勝記録は「5」

調教師の別勝利数を見ると、5 勝をマークした高橋三郎調教師が単独トップである。なお、ダートグレード競走として施行された第 20 回以降に限ると、複数回の優勝例がある調教師はまだいない。

■「1 枠」や「2 番」が勝利数トップ

枠番別勝利数を見ると、トップは6勝の「1 枠」で、5勝の「7 枠」が2位、4勝の「3 枠」が3位だ。なお、未勝利の枠番はない。

また、馬番別勝利数を見ると、トップは5勝の「2 番」だった。ちなみに、第27回で「12 番」が初勝利をマークしたことにより、未勝利の馬番は「10 番」と「15 番」だけになっている。

(伊吹雅也)